

令和7年度農業技術センター研究成果発表会 発表課題一覧（予定）

1	露地ホウレンソウ栽培における「有機質資材の肥効見える化アプリ」の活用
10:45～	「有機質資材の肥効見える化アプリ」（農研機構）を用い、化学肥料を減肥し、有機質資材に置き換えた施肥設計にて露地ホウレンソウ栽培を実施した。結果、堆肥利用により化学肥料を36～61%低減し、肥料代を約3,800～17,300円/10a削減した栽培が可能であり、アプリによる減肥を行っても、収量は慣行とほぼ同様であることが示唆された。
2	群馬県の春および秋冬ネギにおける黒腐菌核病に対するピラジフルミド水和剤セル成型育苗トレイ灌注処理による防除効果
11:00～	群馬県のネギ産地では、ネギ黒腐菌核病の防除に苦慮している。本試験ではピラジフルミド水和剤による春および秋冬ネギの黒腐菌核病に対して、定植時の灌注処理1回で、収穫期の発病を秋冬ネギでは10%程度の発病に抑えることができ、春ネギでは30%程度に抑えることが可能である。
3	群馬県育成ナシ及びイチゴ新品種の果実成分の特性
11:15～	ナシ新品種「群馬N2号（仮称）」、イチゴ新品種「群馬I-RG1（仮称）」及び「群馬I-RG3（仮称）」について、果実特性を把握するため糖（ショ糖、果糖、ブドウ糖）や有機酸（リンゴ酸、クエン酸）の成分含量の測定を行った。得られた結果から新品種の食味に関連する特性を明らかにした。
4	イチゴ新品種「群馬I-RG1（仮称）」および「群馬I-RG3（仮称）」における炭酸ガス施用の効果
11:30～	「やよいひめ」に合わせた栽培管理下で炭酸ガスを施用した場合、イチゴ新品種「群馬I-RG1（仮称）」の収量の増加率は、「やよいひめ」より安定しない傾向であった。「群馬I-RG3（仮称）」の収量の増加率は、「やよいひめ」よりやや低い傾向であった。炭酸ガス施用により、正常果の割合が増加した。
5	スイートコーン栽培におけるドローンを活用した薬剤散布作業の省力化
11:45～	吾妻西部地域ではスイートコーンの生産が盛んに行われているが、薬剤散布作業には多大な労力と時間を費やしている。そこで、スイートコーンの防除にドローンを活用したところ、背負式動力噴霧機と比較して散布時間を大幅に削減でき、アワノメイガ、オオタバコガに対して同等の効果があつた。

6	ウメ新品種「群馬U6号（商標名：ゆみまる）」の特性 —「白加賀」用受粉樹としての評価と適正樹形の検討—	園芸部 果樹係 柿沼 宏明
13:15～	ウメ新品種「群馬U6号（商標名：ゆみまる）」は自家結実性を持ち結実良好であることに加え、「白加賀」の受粉樹としても期待されている。受粉能力は「南高」と同等であり、適正樹形は、2L果以上の多さや作業時間の少なさから開心形が最も優れた。	
7	半わい性台木JM2台を用いた開心形「ぐんま名月」の主枝本数および主幹からの側枝配置距離の検討	中山間地園芸研究センター 松井 郁人
13:30～	半わい性台木JM2台を用いた開心形の「ぐんま名月」において、主枝の本数と配置方法は、今回検討した3つの樹形のうち、一段4本主枝が優れていた。また、主幹から側枝への距離が長くなるほど糖度が高い傾向が見られた。	
8	群馬県における小麦の偽茎長による茎立期の簡易判定法とその活用	稲麦研究センター 赤石 和也
13:45～	小麦の重要な生育ステージである茎立期は、地面から最上位展開葉の葉節までの長さ（偽茎長）を測定することで、簡易に判定できる。調査の結果、主稈長が2cmになる茎立期に相当する偽茎長は約7cmであった。麦踏み時期の判断などに活用できる。	
9	早植栽培（6月上旬植）における水稻高温登熟耐性品種「にじのきらめき」の疎植適応性	東部地域研究センター 廣岡 政義
14:00～	「にじのきらめき」は、栽植密度を44株～37株／坪の疎植にした場合においても、生育に問題はなく、標準的な栽植密度61株／坪と同程度の収量・品質を確保できる。	
10	令和7年度におけるイネカメムシの発生状況	土壌・病害虫部 発生予察係 菊池 優以
14:15～	令和7年度のイネカメムシの分布は、令和6年度に比べて早い時期から西部地域、桐生地域に拡大した。これは令和6年度中に県内各地に分布したため、各地で越冬したことが要因と考えられた。一方で、令和6年度に被害があった地域では、防除意識と防除圧が高くなり、被害が軽減した事例が確認された。	
11	全体質問	
14:30～		
14:45～	事務連絡、閉会式	